
普通じゃない生徒たちの密約と冒険～僕らは普通でないことが嬉しい～

カーレンベルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通じゃない生徒たちの密約と冒険～僕らは普通でないことが嬉しい～

【Zコード】

N3233

【作者名】

カーレンベルク

【あらすじ】

沖縄のある場所にそびえる私立、文都高校に通う久野夕華は普通である自分にいら立ちを覚えていた。そんなある日、普通ではない考えを持つ男子生徒と出会い。その日から彼女の人生は変わった。

文化祭、夏休み、そして…

彼らは普通ではない行動をする。考えをする。冒険をする…。普通ではない生徒たちは、いつしか普通でない証明として、通じ合えた。

る仲間として密約を結んだ。僕らは普通でないことに喜びを感じるのだ。ある夏の沖縄で、少し風変わりな生徒たちの冒険が今始まる。

序章 少女にかけられた呪文（前書き）

大変お持たせしました、カーレンベルクです。個人的に好みい
ジヤンルでなかつた場合は申し訳ありません。次回にご期待ください。

さて、今回ははじめファンタジーにしようかと迷つたのですが、
前作がファンタジーだつたために、同じジャンルばかり続くと読者
の皆様が飽きてしまうのではないかと思い、文学に着手しました。
文学と聞いてただけでめまいがするような方もいらっしゃるのではないかと思いますが、文学にしかない深い小説の世界を楽しむ事も
できるはずです。

私自身、文学作品を書くのは初めてですが、自分の中にある知識
をうまく使って、なるべく読みたくなるようにつくりていきたいと
思っています。今回もいつもと同じく、更新日のおおよその目安
を後書きに記載しておきます。では…カーレンベルクの小説の世
界をじっくりとお楽しみください。

序章 少女にかけられた呪文

彼は机に突つ伏していた。

両腕を額のところまでつけて、体を椅子に丸めてひっそりとしている様子は、まさに戦場の塹壕を思わせた。

「ここは教室だ。」

身を隠す場所などどこにもなく、彼はさらしものになっている自分の左の頬を夕日に照らされていた。

田の前には黒板に白いチョークで、それもかなり太めの字で、45分までに終わらせる。逃げたら逃げた日の分だけ課題を追加する。と書いてあった。

周囲には誰ひとりとして残つておらず、彼が彼自身の存在が置き去りにされたことを、この世の全ての憎悪として表現しているように私には見えた。

この手の生徒は凶暴であるかと思われるだろうが、彼は違つた。

違つたというより、そもそもこういった補習という特殊な場にいる人間が普通であるわけがないと私は思つていた。

だから彼に声をかけた。

自分を変えてくれる人間が欲しかった。

普通とこゝ沼に呑まれなによつに救いを求めた。

半分は好奇心だつた。

残りのもう半分は分からなかつた。

万が一、ただ課題が面倒で寝てゐるだけだつたのなら、適当にあしらつて帰ろう。

私は彼に近づいた。

本当に眠つているのだろうか？

背中が肺の空氣圧でしほんだり膨らんだりしてゐるのは確認できたが、肝心の反応がない。

彼の乱雑に伸びた後ろ髪が、開いてゐる窓から入つてくる風になびき、眠りといふ心地よさに拍車をかけていた。

背丈は小さく、黒い制服に包まれた漆黒の腕のラインは、女性のものと見分けがつかないくらい細かつた。

見た目で人を判断するなどよく言つものだが、いつもこの決まり文句をうつとおしいと思つときがある。

とくに彼を見た時、私はどうしてこんな子が、と無意識に考えていた。

考えられる理由は、おやぢく勉強ができないから。

ああいう派手な格好が嫌で、なおかつ勉強ができないのかもしない。

とにかく考えていても仕方がないから、声をかけようと彼の肩をコソコソと軽く触つてみた。

何かが私の手についた。

湿った黒髪だ。

短いからきっと彼のものだろ？

今だに反応がない彼をよく見ると、字がびっしりと埋まつた答案が彼の上半身と机の間に挟まれていた。

ちょっといたずらして見てやろう。

私は紙を引き抜こうと、彼の前に出てきて、その白くどがつた先っぽを引っ張つた。

ベリッ、ベリビリー！

「あーーー！」

彼の書いた答案用紙が、驚くほど簡単に八つ裂きになってしまった。

「「、「じめん！　私てつきり…」

私は彼を見て声を止めた。

泣いている。

よほど頑張つて書いたのだろう。

それを私が一瞬でメチャクチャにした。

しかも単なる気まぐれで。

最低だ、自分。

彼女は地殻に眠るマグマよりも深く後悔した。

彼はまだ泣いている。

それもそのはずだ。

私は何とかして許してもうひとつ頭を下げ続けた。

「本当に「じめんなわ」…　こんなに簡単に破れるなんて思わなかつたの…！」

「本当に反省しているのかい？」

泣いている割には落ちついた声で彼が話し始めた。

本當かと言われば、それは嘘だ。

しつかりばれている。

本當は破れる以前に、見よつとこつ心の汚れをえなければ、事件は起きなかつたのだ。

私はさらに彼を怒らせたと想つた。

なんて図々しいんだろ？

悪いことは悪いから、しつかり反省しようと、小学校の頃から習つてきたのに、いまだに高校生にもなつてそれができないなんて、情けなさすぎる。

みんながそudadから、みんなが一緒だから、それが正しいという理由はないけれど、黙つていれば、ワカラナイ、バレナイ、オイシイト「ロダケヲ、キガルニモツテイケバ、ダイジヨウブ…」

「私は、みんなと一緒になんて、普通になんてなりたくない。」

いつの間にか、私は自分から彼に話していた。

「こんな汚れた世界なんて、大つ嫌い。」

そうだ、自分は変わりたくてあなたに近づいた。

なのに、何をやつているのだろう？

ひょつとしたら、恐ろしいのかもしれない。

普通じゃなくなる」とだが、恐ろしくてたまらない。

「なぜ？」

「え？」

なぜと聞かれたことも、なぜと考えたことも、この生活中では不思議なことに一度もなかつたのだ。

急に心から謝りたい気持ちになつた。

なぜかは、これだけはいくら理由を突き詰めても分からなかつた。

「「」めん、本当は、どうせバカな答えに違いないから、笑つてやうと思つた。それと、破れないから、大丈夫だと、思つた…。笑いなさいよ。軽蔑すればいいでしょうー。」

私は後から来るであろう、彼が私をさげすむ日の衝撃に備えるため、徹底的に自暴自棄にならうとした。

だが、彼から帰ってきた言葉は…

「よかつた。」それで僕の仲間だね。君は普通じゃなくなつた。
おめでとう。」

本当に変わつたやつだった。

恨まれるどころか、さっぱりとした穏やかな口調で、おだやかな瞳で、逆に祝福までされてしまったのだ。

突如として立ち上がった彼は、勝手に私を抱いて、慰めるように背中をトントンと叩いてくれて、私は彼と同様に一滴の涙を流した。

それは、まるでどこかの異国の文化のように軽率で、普通ではなかつたが、心から相手を思はずシリとした重みがあった。

自分が親におはようも言わない態度に腹がたつた。

しかし

「な、何したの？」

恋人でもない相手に抱かれて、顔を赤くした私は怒りを覚えた。

それは彼をまだひとかけらも理解していない反応だった。

「怒ってるのかい？」

「それ以外に何があるって言つの？ これは、そう、セクハラよ

！」

だが、彼はクスクスと笑つた。

「な、何がおかしいの？」

拳を強く握りしめて、私は怒りにわなわなとふるえていた。

今の今までそつだつたのに、彼は簡単にその炎を消してみせた。

「別に。僕は僕なりにあいさつしただけだ。普通じゃないあいさつを。君はもう普通に戻りたくなったの？」

でも…

「大丈夫。別に卑しい気持ちなんてない。嫌なら別のを考えよう。でも、礼とか握手とかはなしだ。」

心を奪われたというか、私は好意とかいうものとは別に彼を知りたくなった。

「い、いいわ。でもこれでおあいこだから、解答用紙破った件は水に流してよね？　いい？」

彼は黙つて頷くと、教室の出口のところに止まって振り向いた。

「僕は木島隆平。
君は？」

「あ、私は、夕華。
久野夕華。」

名前など聞いてどうするのだろう？

別のクラスだから会う機会もほとんどないし、はっきり言ってあまり近づきたくなかった。

言いかえれば普通じやない状況に私が慣れない以上はこの男子生徒に会う勇気がなかった。

しかし、勇気は出すものではなく、つくるものだとこの時分かつた。

去り際に彼の言った一言だ。

「そうそう、僕が泣いていたのは紙を破られたからじゃない。」

「え？」

「よく見て」「うるさい。それ、僕の書いた悲劇小説だよ？　おかしな話だけどさ、自分で書いて、自分で泣いてたよ。」

だから紙は水分を含んで破れやすくなっていたのだ。

「やつをおあいひつて言つたね。分かった。君さえよければいいんだ。じゅあね久野さん！」

やられた。

私は一体、何について謝っていたのだらう？

「ちよ、ちよっと待て——————」

勝ち逃げされた後に湧き上がるのさ、嫉妬深い女性のもう一つの闇。

「あのバカ！　許さないんだからー。」

だが、かえつて気持ちがスッとした。

彼にある意味ではあるが、会いたくなつた。

会えるよつになつた。

私の普通ではない人生が、こつして始まつた。

面倒ほど面白いものだと、今となつては純粹に考えることができ
る。

心の持ちよつ一つで、こんなに世界は私唯一の個人的な創造物と
なるのか。

私は自分が普通ではないといつことを誇りに思つ。

自分が異常者と言われよつが、なんでもない。

あの夏にやつたことの全てが、普通でないときよつもはる
かに輝いていたのだから、私は普通でないことが嬉しい。

序章 少女にかけられた呪文（後書き）

次回の更新は13日の予定です。

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった（前書き）

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった

私は久野夕華。

沖縄のとあるところに建つ文都高校の一年生だ。ぶんと

五月も後半を迎える、もうすぐ行われる我が校伝統の文化祭に向けて、催し物のアイデア起草に追われている。

ついでに言うと、最近腹の立つ出来事のせいで、一人の男子を憎んでいた。

「何よー、ああもう、思い出すと頭にくるわー！」

私は手を後ろに伸ばして、締めつけ具合がうつとうしき「ゴム製の髪留めを外すと、大きく頭を左右に振り、髪型を整えた。

髪は長いがよく後ろで結んでいることが多い。

女子の間では夕華。

男子の間では良くて久野さん、悪くて茶色い出来立てポーラーガール、と呼ばれていた。

おそらくこの一本縛りが、彼ら男子生徒の恋に飢えた目にそう映つたのだろう。

独創的なアイデアを期待する、と文化祭の出し物企画用紙には印刷されていた。

まるで年寄りでも分かるよつここの部分だけがフォントで異様に強調され、それは誰かの嫌がらせに見えるほどだ。

その印刷の下には、
　　ただし、一般的の常識から外れたもので
ない範囲に限って提出したとみなす
　　とあつた。

こんなとき、彼なら、木島隆平ならどうするのだろう？

さすがに彼でもそれはないだろ？。

私は頭に浮かんだ、もはやこの世のものではないアイデアを記憶から消していった。

これでまた振り出しに戻ったわけだ。

もう小一時間もこの状況が続いていて、私は今日中に決まらないのではと焦りはじめた。

独創的かつ、常識内、は例えるなら水と油だった。

油はシャンプーで流してしまえば良い気がした。

「仕方ない。とにかくお風呂で考えよつ。」

私は湯船に浸^つかつてみた。

「……」にいても彼のことばかりが気にかかる。

その存在が普通でない限りは気になってしまつのも無理はない。

それよりも、どうしたら良いアイデアが浮かぶのかを考えなければならなかつた。

普通に悩んでいても何の解決にもならないのは、先ほどのアイデア用紙を片手にうなつていた時間すでに証明されていく。

「あいつなら、どうするんだろ?」

いつそ常識ことらわれずに行動したらどうか?

私は急に何かをひらめいたような気になつて、うつむき加減の首を上げた。

そうだ、常識はかえつて邪魔だ。

そもそも、独創的なアイデアに常識というパズルのピースは当てはまるのだろうか?

はあるものか。

だから何も生まれないし、思いつかなかつたんだ！

生み出す「」ことができなかつたんだ！

「バカバカしい！ 本当に、私ってバカ…」

彼は教えてくれた。

「」の湯船にあふれる液体も、滝のよつたシャワーの音も、見方を
変えればいい。

誰に笑われようが、何もアイデアがないやつよりはマシなはずだ。

「よーし！ やるぞ！」

私はなんだか楽しくなつてきて、天井に腕を突き上げた。

おかげでわきの筋肉をつてしまつたが、そんな代償とは比べ物
にならないくらいの何かを得た。

この枠から外された解放感。

無限の宇宙を旅する自由な創造物。

私はつくるんだ！

普通じやない証明をしてやるんだ。

今「」の場から、常識といつも黒の世界から抜け出さつ。

翌日、私は久しぶりに早く家を出た。

こんなことなら遅くまで起きていなければよかつたと思ったが、なぜか学校へと行きたい気持ちが前を向かせた。

「あのバカ、見てなさい。文句言つてやる。」

隆平の教室は隣にあつた。

昨日の夜、さんざん寝る前に頭の中で彼をやつつけたのに、それだけでは気が晴れなかつた。

ぐだぐだと一人で悪口をつぶやく私に、妹がたずねてきて、心配そうに見つめた。

妹は今年で中学一年になるが、小さじ頃のように私に甘えてくる。

中学一年といえば、私が一番荒れていた頃だ。

何をするにもネガティブで、マイナス思考で消極的だった夕華に比べたら大違いと母にからかわれ、むつとした。

妹の美沙^{みさ}が急に憎らしくなって、思わず彼女のところまで行って、しばらくにらみつけた。

「ねえ、お姉ちゃん、どうして私のこと怒ってるの?」

妹は私の視線におびえきっていた。

おびえながら宿題に集中していた。

私は自分のとつたこの行動を若者病、と呼んでいた。

道理は通っていないが、頭にくるとにかくキレる、とにかく怒る、気のすむまで怒り狂う。

若者にしか見られない稀有な症状。^{けう}

それは大人になるにつれて姿を消していくのだ。

後になつてついに泣き出した妹が、私に甘えて子猫のように胸に飛び込む様子はさすがに特殊な病^{やまい}で、私は命名に困ったものだ。

そんなことを考えていたとき、私は母よりもっと憎らしいものを見つけた。

後ろから追っている様子に、彼は全く気がついていないようだ。

「木島…」

大きな叫び声をあげて、私は彼の背中を思い切り平手打ちした。

彼のにおいが手についた。

「痛つ！」

女の力でも、つたなく、小柄な体躯は半ば吹き飛びやうになつてゆらめいていた。

「なんだ？ ああ、久野さんじやないか。 昨日はよく眠れた？」

彼は怒る様子もなく、にこやかに手を上げて挨拶をしてきた。

不覚だつた。

「こいつには普通のルールは通じないのだ。

「よかつた、僕の顔を覚えててくれて。」

「ちよつと、私は別にっ！」

案の定、私は彼のペースに呑まれていた。

これではまるで隆平のことを探してお好いでいるみたいで、ものすごく恥ずかしかつた。

「じゃあ、どうして話しかけたの？」

「シ・カ・ニ・シー！」

さりに頭にきて、夕華はもつ一発彼にお見舞いした。

バシンという物騒な音が、吹奏楽部の部員たちの歌つ上の学窓まで響いたようだ。

「ゲホッ！」

彼女たちは田下の状況を見て、たちまちうわさを始めた。

男女間のトラブルほど彼女たちにとっての好物はない。

フラれたの、とか、あの一人はどうなるの、などと永遠としゃべり続ける。

「わかった。新しいあいさつを考えてきたんだね？久野さん、つてすごいな。もう少しおとなしいと思っていたけれど、本当は

…

「私は怪力女じやありませんからね。あと、それがあいさつだつたらあんた死ぬわよ？」

彼はそれ以上何も言わなかつた。

勝つた、と思つた。

が…

「嬉しい？僕も嬉しいよ。そんなに丁寧に注意してくれるなんて、よっぽど僕のことが好きなんだね。」

「うが――――うー」

「では、アイデアを書いた紙を前の教卓に提出してもいいついで。」

私が彼に勝利しそこなつてから数時間後、昨日書いた文化祭のアイデア用紙を出すときがきた。

そういうえば、彼は何を書いたのだろう？

思えば隆平から学んで今の私がここにあるのだ。

「少し、書きすぎたかな？　いやいや、油断ならぬやつめ。」

私のアイデアは、「恐怖、宇宙たこ焼き死の串刺しショーカー！」というものだった。

私にしては頑張った方だ。

「このアイデアは後日私がチェックして、生徒会に通し、選ばれたら採用となる。」

先生の声に、なんだ、と私は少し落胆して肩の力を抜いた。

この教室の中で決めて、その代表が生徒会に通さない限りは、意見を見せる場がないのだ。

所詮はそんなもの。

文化祭といつても、何もやりずに終わってしまうクラスだってある。

適当に思ひ浮かんだだけのもやもやしたアイデアをもつたと提出

し、眞につものだらだらとした調子でおしゃべりや騒れ合いでかかる
まつが楽しいのだ。

これが普通といつものだ。

色なんかなくたって、いつの間にかやつていけたりしてしまつ。
行事の終わりには、素晴らしい文化祭、思い出に残る体育祭とい
う社交辞令が飛ぶ。

一体何が残るのだるい？

私にとつてはつまらないものでしかない。

「つまんないな。」

「なんだ久野。 良いアイデアでもあるのか？」

とつてに出た私のつづふんに反応する教師。

どうせお前も少年時代には、ここにいる人たちと似たような世界
にいたくせをして、何を偉そつに。

私は面倒くさくなつた。

誰に聞いたつて、独創的なアイデアを常識として受け止めて考え
る奴などいない。

そんな途方もない哲学は嫌だった。

そんな難題をなぜ私に押しつける？

想像力ならあなたの方がずっと上だ。

生徒が自分でることに意味があるというが、教師にも思い浮かばないものを、まして生徒にやらせるというのが間違っている。

という以前に、皆やることに価値を感じていない。

だったらあなたが皆を動かせばいいじゃないか？

私は社会に対する怒りを感じ取った。

あんたが動けば皆動く。

そうでもしなければ、高校生活なんてつまらないままだ。

教師は皆を導くためにいるはずで、それをせずに何が「先生」だ。

今は手本となる大人でさえも、つまらないんだ！

「何かあるか？　おい、久野？」

「先生は？　先生には何か良い案でも？」

彼は何を分かりきつたことを、とあきれた顔をした。

「あのな、久野。　先生が考えたら何にもならないだろう。　お前たちが考えて、やるから意味があるんだ。　違うか？」

」のマニアル通りの言葉のせいで、何かが頭の中でキレたのだ。

「違います。 そんなの、おかしいです。」

「え、 なんだって？」

教室中の生徒たちが、立ち上がつたままの私に視線を集中させ、ザワザワしていた男子も静まり返った。

第1章 瞳は黒くても、世界は真っ白だった（後書き）

次回の更新は16日の予定です。

第2章 その涙の意味を、いつか分かち合える日が来るだりつか？

「違います。先生は変です。いいえ、普通といつぞの病気にかかるっています。」

全員の瞳が、一瞬で私に向けられたのが分かった。

これが、普通の引力なのか？

それでも私は口を開く。

「私は、一人の人間として先生を見ています。」

男子の一人が、挑発気味に口笛をヒューと鳴らした。

でも、そんな意味で言ったんじゃない。

「待て、それはつまり…」

驚いた。

この教師もどうやら意味を取り違えているらしかった。

私はその程度の頭の女としか見られていなかつたといつことだろう。

本気で私の言った意味を、教師は考えてはくれなかつた。

本気じゃなかつたんだ、このひそつきー。

「もうこいつ意味じやありません！」

だいたい、それでは話の内容が飛び過ぎてよく分からなのはずだ。

「なら、じうこいつ意味だ？」

言つんだ自分。

勇氣とは『えられるものじやない。

自分でつくるものだ。

私は両肘(りょうしゅう)を灰色の机について手を組む男に言い放つた。

「先生はなぜ考へないんですか？ 生徒がいて、先生がいる。それが教室です。違いますか？ 授業だつて先生がいなかつたら、私たち何もできません。私は先生のその決まり文句が嫌で仕方ありません。」

何よあの子、という声やあざけり笑いが周囲から聞こえてくるが、かまうものか。

私は女だ。

嫉妬深い女に生まれたからには、絶対に最後まで全部言つてやるんだ。

「私を、私たちを差別しないでください！ 確かに想像力では先

生の方が上で、先生のアイデアの方がいいに決まっている。でも文化祭だって、行事はみんなでやるもののはずです。なぜ先生はアイデアを出さないの？なぜ自分だけ特別だなんて思うの？私はそれがさみしいです。はつきり言いますが……」

私は大きく深呼吸した。

「私は本気です。本気だし、普通の子じゃありません！私を差別しないで！差別であなたの心を汚さないで！大嫌い！」

「おい、久野！」

先生の呼び声にも応じずに、私は相変わらず彼に向ってヒューヒューと高い音を出す下らない教室を後にした。

「お前たち、静かにしないか！」

「女たらしー！」

「キモーイー！」

教室では先生に対するブーイングや理解不能の男子の叫び声が飛び交っていて、もはや授業どころではなくつっていた。

俺は何をやつているんだ。

大好きな片想いの子が出て行ったのに、その子の正体を知つて幻滅して、追うのをためらうなんて。

クラスの片隅で、夕華を今までひつそりと愛してきた潮田弘樹しおたひろきは、入学して以来、この文都高校初の大クーデターを前に、何をするべきか見失いかけていた。

あの担任が、生徒をうまくまとめることができない器であることは、彼自身も薄々気づいていたし、それが今になって明らかになつたところでどうでもよかつた。

だが、彼女の人柄には目を見張つた。

彼女は一体どこへ行つたのか？

自分は普通ではないと言つていたが、何か悩みがあつてああなつたのなら、身勝手ではあるが、片想いの相手として放つておけない。

自分の手での子を悲しみや邪険から救つてやりたい。

「倉澤のバカヤロー！」

教室は、教師である倉澤道雄の悪口くわざなわみちおでますますヒートアップした。

あげくは一部の男子による帰れ帰れの大合唱までが発生した。

「おい、静かにしろ！ 先生を呼び捨てにするんじゃない！」

皆が先生に反逆していた。

フランス革命を世界史で翻つたが、今この現場についてはそれ以上のような気がする。

自由を求めて授業をたたきつぶす、民衆、もとい生徒たちほどの惨劇に夢中で、誰ひとり俺に気づいてはいなかった。

潮田はトイレに行くふりをして、それとま反対の方の廊下に向かって走つて行つた。

屋上から見える星を想像する機会など、私にとつて少なくともこの一年間、ただの一度もなかつた気がする。

「田見たら、どんな気持ちになるのだ？」

「はあ…」

「ここに来てからため息はすでに四回田だ。」

汚いコンクリートの上に寝そべつて、空を見上げる瞳に映るのは、雲に隠れておぼろげな光を放つ太陽と、沖縄の潮風に乗つて優雅に舞う海鳥の群れ。

ああやつて高いところまで行けたら、誰にも普通がいいなんて文句は言わせないのに…

「何してるんだ？」

「うわあー。」

無意識のうちに人影を見た私は頭を思い切りぶつけそうになつた。

立ち上がりて振り向くと、うちのクラスの潮田がそこにいた。

「なんだ、君か。」

潮田と夕華は顔を知つてはいたが、あくまで同じクラスだからといふ理由で互いを確認できるくらいの縁しかなかつた。

「私に何の用？」

もしかしたら、笑いに来たのかもしれない。

彼女は警戒して険しい顔つきで接した。

「そんな目で俺を見るなよ。俺は、その、お前が心配で……」

「今初めて話をしたのに? うそつき。」

「うそじゃないって。ちゃんと心配してるよ、久野。 なあ、どうしてあんなこと言つたんだ? 順じきにうわさするだ。 お前のことを……」

「やめてー。」

彼女は精一杯力を込めてひなつた。

はるか上空を飛びまわる鳥たちが、彼女の声を仲間の声と勘違いして鳴いていた。

「悪かったよ。俺はただ、お前を助けたくて…」

「あんたには分からぬ。私は普通になりたくなーの。」

先生にあんなことを言つてから、私はもう普通の子と違つて、皆の輪の中に入る」となんてできなー。

無理に戻るうども思つていない。

でも、なぜ私は泣いているんだりうへ。

恐ろしいのではなくて、さみしかったのではなかろうか?

そう、普通ではない子が私だけ。

「ほら、ハンカチかしてやるよ。戻るうぜ、教室に。」

女心としては一人にして欲しかつた。

戻つたところでもじめなだけなら、戻らなければ方が良いのだ。

「やだ。 私帰る。」

「帰るって、学校はどうすんだよー。いい加減目を覚ませよ。

どうしてあんなこと言つたんだ? 誰かに何か言われたなら俺が…」

「そんなにみんなの中にいたいの? ベリして?」

彼はなぜそこまで集団にこだわるのだらう。

そんなにみんなと同じ、普通がいいのなら、私のところになんて来なればいい。

そんなに私を連れ戻して以前の漫然とした無気力なクラスにしたいなら、彼一人でやればいい。

彼と教師と私以外の全員で、死ぬまでニセモノの喜びを満喫していればいいんだ！

私は心中にその気持ちをしまいこんで、屋上から逃げ出そうとドアを開けた。

「…。」

「やあ、久野さん、ど、お密さん？」

やつだ。

いつの間にかそこに木島隆平が立っていたのだ。

第2章 その涙の意味を、いつか分かち合える日が来るだりつか？（後書き）

次回の更新は20日の予定です。

第3章 わみしさを分かつてくれる人

私の前に、いつもの「あいつ」が立っていた。

あきれるほど素朴な顔つきで、だが私を確認するとにやりと笑つた。

いつからそこへいたのかは知らない。

田に涙をためて、それがあふれ、頬をつたつて制服をすべり降りていき、こぶしの先に握られている文化祭のアイデア用紙を濡らせていた。

私は紙に書かれたものがなんであるかすぐに分かった。

なるほど、私はまだ彼についての行動を予想するには未熟だったということか。

普通でない彼は、私のように普通に、面白おかしなアイデアを描くのではなく、それすらぶち壊して何かを得ようとしていた。

答えなんて、そう簡単に見つかるはずがないのに…

「やあ、久野さん。そちらは、お客様のようだけど？」

「知り合いなのか？」

この時の潮田の顔は、私への下心が丸見えだつた。

おそらく彼にまみつと鮮明に見えているに違いない。

「ひょっとね。」

私は隆平の何なんだろう？

あの夕陽の熱に照らされた教室で会った田から、彼との不思議な関係は始まった。

「お前、久野の何なんだ？」

潮田は明らかに怪しい男を見るような目をしている。

いけない。

今やつと話したら、絶対に喧嘩になる。

「私、もういかなきや。」

普通とは違う考え方の彼に、はたして潮田は冷静でいらっしゃるだろ？
か？

私というものを奪われたと感じたら、こんなふざけたやつに俺は負けたのかとなるに決まっている。

私は必死に彼の気をそらそうとしたが、つまづくは行かないのが現実だ。

「なんだこいつ。泣いてるや？」

このバカ、泣いて入ってくるやつがいるかと言いたくなつた。

あまりの彼の意外な行動に、潮田はショックと笑いを隠しきれなくなつっていた。

そんなに、そんなにおかしいか潮田。

何だらう？

私は隆平に親近感を抱いていたということだらうか？

彼を笑うなど、私の心が叫んでいた。

思えば彼は、あんなことをした私を、最低だと自ら証明した私を、セクハラ絡みと言えば聞こえは悪いが、熱い抱擁で包んで、赦してくれた。

くやしい。

彼を侮辱した潮田を、今すぐぶつ飛ばしてやりたい。

「こんなやつと久野は知り合いなのか？」

違う！

「そつぞ、泣いている。僕は泣いている。」

突然、彼が初めて真剣な口調で話した。

「普通でなくたって、昔は普通だった。今は違うけど、普通でなくたって、そこにはちゃんとした理由がある。人の人生を、生き様をバカにできるほどだったのなら、君は相当幸せに生きているんだね。」うらやましいな。」

ちょうど相槌あいだいを打つよに、チャイムが鳴った。

こんなにさみしげな音色は、今だかつて、学校という枠に入るずっと前からでも聞いたことがない。

それやくよくな彼の声と鐘の音は、絶妙にからみあって、私は不動の姿勢で、やがて降るであろう雨を待つ人になった。

また涙があふれてきた。

でも、さつきの涙とは全然違つ。

泣いて情けない姿をさらしてくるのに、ほんのり温かい血が胸のそこから湧き上がってきた。

「隆平。」

「なんだい。」

「私は、幸せなのかな?」

こんなこと、バカげている。

まともな答えが返つてくるわけがないのに、私はこの初めて感じた気持ちに翻弄ほんろうされていたのか？

そんなとき、彼はこう返事した。

「一緒に不幸にならう。 それなら一人で幸せになれるよ。 きっと。」

ぬくもりを感じる。

あの一度目のあいさつが、私の古い存在から私を解き放つていくように、降りだした雨が人の情を知り、反対に雨の群れに打ちつけられる私たちは、互いの深いところまで気持ちを探り合つたのだ。

「バツカじやねえのお前まへ。 意味わかんねえ。」

私を取られた腹いせか、居場所のなくなつた潮田は濡れる体を揺らしながら屋上から出ていった。

「私を抱いてると、風邪引くよ？ いいの？」

「ああ、構わない。 今さよひど、濡れに来たところだ。」

本当は涙を隠したいのだろう。

「でも濡れに来たの本当の意味は？」 と私が聞くと彼は

「もしこの雨たちが蒸発して、もう一度大地から天へ帰つて行つたら、僕の存在に気づいてくれるだろうか？ どう思う？ 君が来る前は、僕はずつと一人で、代わりに雨たちが返事をしてくれた。」

そうか。

隆平はずつと一人でさみしかつたんだ。

だから変な話だけど、私にあいさつしに来たのだろうか？

あんなに心地よさそうな笑顔をしているのに、内側はとっても傷つきやすくて、纖細だつたんだ。

だから同じ立場にいる私がもうい女だつて、思つているのかな？

私が私自身の弱さに気づいていないだけかも…

「でも良かつた。 隆平は私に会えたなんもの。 ね？」

「本当にいいの？」

彼は潮田が出ていつた方を向いて、私に呼びかけた。

私と彼は、果たして会えてよかつたのだろうか？

でも、彼に私の気持ちなんて、分かるわけがない。

「私、できないよ。 潮田を追いかけたくない。」

人には人の生き方がある。

それが世の常であるし、本当はあなたと二人でこうしていいたい言い訳だつてことも分かつっていた。

「それに、隆平は？ 私が行っちゃつたら、隆平はまた一人になつちゃうんだよ？」

私だつて一人になつてしまつたら、どうやって生きていけばいいのかと途方に暮れてしまう。

隆平が、私のそばについてくれなきゃ、私は…

「私のそばに、隆平がいてくれたらいーのに…」

一度離れてしまつたら、戻つてこられる自信がない。

古傷の痛みがぶり返してくれたような感覚に襲われた私は、なにも考えられなくなつた。

「いいんだ。君は僕を理解してくれたんだね？ 行つてあげるといい。彼だつてずっと待つているとは限らない。」

「やだよ…」

隆平が私から離れていく。

いや、私が隆平から遠ざかっていく。

「久野さん。僕なら大丈夫。」

「私は大丈夫じゃない！ ダメ。これじゃダメよ…」

「今までだつて一人でやつてきたと言えば、君との出会いを否定

することになるけど、僕だって、かなり本気だつたんだよ。君と一緒にいようと、いつの間にか本気になつてた。」

「そんなこと言われたら、ますます一緒にいたくなるじゃないか、このバカ！」

性格も、ルックスも、背丈もいまいちで、ビニにでもいる男子なんだ。

なのに魔法のように世界を変える力を持つてて、夢のような存在。

また私に魔法をかけて、戻りたくなつたら連れて行つてくれるだろ？

空を飛ばしてくれるだろ？

「じゃめんね。 私って弱いんだ。」

勇気はつくるものだけど、今日のはまぐれなんだ。

だから…

「だから負けそつになつたら、隆平のもとに来ていい？」

「…」

彼はうなずいてくれた。

そういうところに、私はいつのまにか惹かれていたのかも知れな

い。

「ありがとう、またね。」

雨はやんでいた。

「私、やってみる。」

水にぬれた靴音が、妙に軽快な水しぶきを上げた。

第3章　さみしさを分かつてくれる人（後書き）

次回の更新は24日の予定です。

第4章 意志の代償（前書き）

読者の皆様、お疲れ様でした。唐突に何をと思われたことでしょう。本作はこの章以降は作風の「堅苦しさ」を新たなる始まり（第五章のテーマ）より、一新することとなりました。「堅苦しさ」のレベルを緩和することにより、これまでの章が単なる始まりの前の段階に過ぎないこと、および、これから物語との区切りを明確にする役割を果たしていくため、今回、作風を変更することとなりました。作風を物語の途中で変更するのは、いかがなものかと私自身大いに悩みましたが、深い考慮の結果、作家の意図（すなわち何を訴えたいか）が明確にされている部分が存在しているのなら、たとえその後の作風に変化を加えようと、訴え自身には変化がないために、結果として私の「小説とは何かを後世に訴えかけるものでなければならぬ」。なぜなら、それが人間的であることの証明に疑問を投げかけ、理性の発展を産むからである。」という信条に反していないため、今回作風を変更させていただきました。

当サイトに掲載されている作者の方々の作風を視野に含めても、硬派な文章の方が好きだという方はほとんどいらっしゃらない、と私自身が感じたこともあり、「堅苦しさ」の基準を下げる方針を貫くことをお伝えいたしました。

第4章 意志の代償

廊下を濡れた上履きのまま、ペタペタと音を立てて走っていく女生徒が一人、授業中だというのに、カバン一つ持たぬまま息を切らしていた。

風に茶色いポニー・テールを揺らしながら猛スピードで前へ進んでゆく様は、例えるなら自分のクラスで男子がうわさしていたあだ名、茶色い出来立てポニー・テールにそっくりだった。

私は、もう一度彼に会つて話をしなくてはならない。

私がこうなる前、確かに彼は私に好意を抱いていた。

一つだけ不思議に思ったことがある。

男性は皆、顔で女を決めるものだとばかり思つていた。

だからきつい性格の奥さんでも我慢できるのだと、昔よく父から聞いたことがあった。

でも、今の私は何？

性格が悪いからという理由で、そっぽを向かれてしまった。

彼が人を性格で見る出来た人間だったことは嬉しいけれど、その彼を失つた私は一倍の後悔することになつたんだ。

「分かつてゐる。」

私はゆっくりになつて、次第に歩みを止めた。

「現実はいつもこうなんだって。 真実が正しくて、良い方向につながつているなんて、限らない。 一度穴に落ちてしまつたら、一生抜け出せないまままでいることもある。 だけど、それじゃ…」

そこにいた潮田は後ろ向きのまま、静かに首をもたげていた。

何かに集中しているようで、私が声をかけても反応すらない。 だたその時私が知つたのは、彼のごぶしに、異様な力が入つっていたことだった。

「ごぶしから感じとれたのは、暴力をふるいたいとかではなく、純粹な悔しさの表れだつた。

「よう、久野。 もう来ないかと思つてたのに…」

彼は振り向き、上げた手のひらにくつときつと爪のめりこんだ跡のある部分を見せ、私にあいさつした。

「大丈夫？」

「やわるなつて！」

びっくりした私は…

「そう、だよね。 私ってバカだよね。 あんなこと言つてから、

のこのこ顔出しに来るんだもん。ほんと、最低だよね。」

そう言って目を細め、涙が垂れるのを防いでいるほかなかった。

「俺はお前の人形じゃない。まあ、俺の片想いだけど、用がなくなつたら捨てるなんて、俺の方こそバカだったよ。なんでお前なんか好きになつたんだ。」

世の中は何でもそうだ。

今みたいに裏切りに裏切りを重ねたかたまりが、世の中をつくっている。

彼はもう何も信じようとはしないだろう。

信じなくたって、誰も困らない。

なんといつても現代では皆、個人で城壁をつくっているのだから、悲しむ以前に、これがあたりまえなんだ、そうか、と気づかされてしまう。

誰も悪くはないけれど、それは誰もが良い人というわけではなかつたからだつたんだ。

「もう俺に近づかないでくれ。ああ、それともうみんな帰つたから、教室のカギ閉めるの、よろしくな。」

彼はそばにあつたロックカーの上に力強く鍵を置いて立ち去つとする。

「帰つた？　どうこうことなの？」

「俺に聞くなよ。」

苦笑いをした彼は廊下の角を曲がり、見えなくなつた。

私のせいだ。

私のせいで、みんないなくなつた。

みんなの後ろにある日常といつ背景すら、友情といつ絆も、学徒あがなの笑みも、机の横に掛っているいまじまとした、大切な思い出の品々すら薄れていつた。

潮田のあの荒い黒短髪も見えなくなつて、私は膝ひざを折つて床に手をついた。

「普通じゃないつて、どうこうことなの？」

明日を信じて生きていも、もう未来はやつてこないのか？

「私の時計は今日といつ日で止まつたままなんだ。」

でも、私のしたことは決してバカだったなんて、絶対に思つてやるもんか。

彼女はついていたキーホルダーと鍵をわしづかみにして、教室へと続く階段を登りはじめる。

ものすいこ速さで。

風がのどをかすめ、息が切れる。

呼吸が続かず、酸欠で足がうまく上がらない。

それでも：

「光のように速くなりたかつたんだ。音速を超えた先に、真実が見えると思った私は、必死に光を探している。探し物は見つかったのかな？ 過去に逆流したかつたわけじゃない。心の強さを試したかつたんだ。」

「先、生？」

ドアを開けた先に待っていたのは、頭を抱えて机にもたれる教師の姿。

がらんとした空間の中にその男は佇んでいた。

「久野か？ 笑うなら笑え。俺は、教師失格だったってことだ。お前の言つとおりにしたぞ？ これで文句ないな？」

外は昼。

明るかつたはずなのに、ここは夜よりも暗い闇が支配していて、あるはずのない状況が私を苦しめていた。

「どうした、俺が嫌いなんだろ？　もつと囁くべ。」

私は、こんな結末なんて望んでいなかつた。

ただ、現代と違う生き方をしたかつただけだつた。

「どうして、こんなふうになつちやうの？」

私のメッセージは学級崩壊という形で返ってきたのだ。

「あたりまえだ。そういうはぐれ者は社会で生きられないんだつてことを教えるのが俺たちの仕事だ。お前の言つよつこ、俺が動かない、だろ？」

まさか…

みんなを帰らせたのは、わざとそう仕組んだのは、あんただつたのか…

「あんたなんて、あんたなんて…」

これだから大人は嫌いだ。

善人ぶつているくせをして、影でこそこそと笑つているのだから。

「あんたなんて、いなくなればいいんだ――――――つー」

腹の底から発した私の怒号は、隣の廊下のかなたまで響き、消えていった。

「うるせーぞ久野！ 僕にさむ前をまつひとつある責任がある。黙つて従え！ 『れはいいか？ お前のためだ！』」

「ウソだ！ うわあああああーっ！」

「おい久野っ！ 暴れるな！」

倉澤は私の体を抑えつけて、その身を封じようとする。

「はなして！ はなせ変態！」

「変態とはなんだ！ わ前のためにやつてこない、その言い草はなんだ！」

最低だ。

何もかも。

泣きじゃくる私はやがて力尽き、教師のそれるがままになつてゆく。

さりば、私の尊嚴。

散り際の言葉にしてさじつくりこない。

もう少し慎重に言葉を選ぶべきだったのだらうか？

「忘れたのか？ 『れはお前のためだ！』」

「そう言つていれば引っ込みがつくと思つてゐるなんて、本当にあんたのためになるのかよ？」

突然現れたのは、私を見限つたはずの潮田だつた。

「潮田。お前にも分からせなきゃならんようだな、ええ？ いい機会だ。時間はたっぷりあるんだぞ？」

「分からせる？ あんたに学ぶことなんて、何もないよ。」

教師は彼の言葉に、ついに本気になつた口つきで怒りだした。

無理もない。

二セモノと偽善、それに暴力でかためた教師といつ特権の裏にある闇を暴^{あば}かれ、自分がそれにすがつて生きる卑怯な奴だと勘付かれたのだ。

「先生に向かって、そんな口の聞き方をするんじゃない！」

「つるせえ！」

彼は目の前にあつた机を力まかせにひっくり返し、それを床にたたきつけた。

バアアアアン！

木のフローリングにはいびつなくこみができる、机の中に入っているかわいいグラビア雑誌が数冊飛び出した。

「久野のためだったら、あんたにできないことだつて、俺はできるんだ！　いいか、教員もどきが良く聞けよー。俺は、久野を愛している！」

私のこと、本気で嫌いになつたわけじゃなかつたんだ。

彼はちゃんと分かつていた。

普通じやないというだけで、差別しちゃいけないんだつて…

自分のまゝ、頭の中のもやもやを整理できずにいたことが情けない。

「久野、大丈夫か？」

「うん。　でも、私だよ？　いいの？」

いいに決まつてるじゃないか。

それが彼の返事だつた。

「誰だお前は！　元いた教室に早く戻るんだ！」

倉澤の声はもはや稚拙な洞窟ちゆうくつにすぎず、隆平は全く動じていなかつた。

その彼が、心配ですぐに駆けつけてくれていた。

「隆平、私…」

どんなに歯を食いしばったとしても、涙は流れただろう。

「久野、来るんだ！」

不意を突いて、教師の汗ばんだ手が私に伸びてきた。

「おつとー！」

私の体は教師ではなく、潮田の若い肉体に支えられていて、彼は私にっこりと笑いかけてきた。

「スキってなんだろうな？ 僕、自分は性格でものを見る人間なんだって、言い聞かせてるだけだってわかった。変な話だけどさ、好きになつた理由がいまいちよく分からんんだ。こういうのを、若者病つて言うんだろ？」

「世の中には、理屈で説明できなこともある。何しろ僕は、いや、僕らは普通じゃないからね。」と隆平。

「私も、いいと思つ。」

三人は無口だったが、自信に満ちていた。

「ああ先生、僕たちを罰するなら好きにすればいい。今、あなたの人間としての高貴さが試されているということをお忘れなく。」

結局、私たちは一日間の自宅待機を言い渡されたけれど、なんとなく強くなれた気がした。

隆平のおかげでもあるし、潮田から私に譲られた気持ちがそうさせてくれたと言つてもいい。

そして、その翌日…

第4章 意志の代償（後書き）

次回の更新は28日の予定です。

第5章 新たなる始まり（前書き）

いよいよと言えるほどではないかと思いますが、多少は受け容れ難いまじめな文章を緩和した物語の始まりです。（四章までは私の信条ですので変更はありません）なんと言つても今回の物語一新的のメリットは、第一に「こぞやかさ」、第二に、「仲間の個性と魅力、さらには親近感」です。これからはそれらをテーマに物語を進めていこうと考えております。もちろん、物語のはじめと締めくくりはそれ相応の私の信条に沿つて作成します。（各々の章¹）とではなく、物語を総合的に見た時の基準という意味です。）

第5章 新たなる始まり

「エメラルド色の海は貯水池のように、風もないためか、ひとつ
のつねりも起こさなかつた。」

誰かが一人で歩きながら、潮風にべとべと髪をふわつとさせ下
を向いている。

「これは現実なの？」

「そう、君が君である以上、僕はこの無の状態から逃れることが
できないんだ。僕の血を分けてあげようか？ 君が望むならね。」

「いや、やめてー！」

「どうして？ 僕にはもう必要のない命なんだ。君が悲しんだ
といひで無駄な心配だよ。」

その声に反応して、誰もが驚き、または笑って見ている。

「無駄なんかじゃないわ！ あなたは死ぬことで大切な者たちと
一緒に、記憶を消そうとしてるのよ！ 私にはわかるの！」

「分かるかああああああ！」

突如として現れた彼女によって、歩きながら自作の小説を演劇気
味に音読していた木島は強烈な本のビンタをくらつた。

「何が、いや、やめて！　だ。みんな見てるでしょ？」

夕華は不機嫌の絶頂にいるような顔で、プライツと横を向いた。

「久野さん。いやさすがだね。一日間も休むとこれだけストレスがたまるのか。でも、いいの？」

「え？」

彼女は今自分のとつた行動のせいで、周りの反応に気がついて声を失った。

二人はまさに学校中の好奇の目で見られていた。

「恋人みたいだね、僕たち。」

「変な想像しないで！」

「よひ、一人とも元氣か？」

潮田ははじめは威勢よく声を張り上げたが、次第に状況を理解して、おそるおそる質問した。

「なあ、お前らひよっとして…」

「違う違う…」「ひよー…」「いつが悪いのーだから、別にこいつが好きとかじゃなくて、え、ええと…」

彼女の慌てようを見て、彼は隆平に向けてため息をついた。

「どうしてこうなったのかを知りたかったのだが、隆平の涙を見た
彼はたずねる気が失せてしまったのだ。

「なぜとは聞かねえけど、やつぱり氣になるな。」

「僕はどうちでも。もし聞くなら、今度は君を泣かせてあげる
よ。」

木島の笑みからはまがまがしいオーラが漂っていた。

「いや、やつぱりいい。お前の田で分かった。」

「そんなことよつ。」

「ん？」

隆平は夕華に向かって、いつものように落ち着いた声で話しかけ
た。

「僕たちで、何かをやらないか？ 普通じゃ出来ないことをね。
おもしろそうだと思わないかい？」

「普通じゃできることとか？」

私は高らかに鳴るラッパの方に視線を投げた。

あの音楽好きの少女たちを普通とこいつなり、私は何なのだ？

「そんなこと、考えたこともなかつたな。何か、いいアイデアないか？」

潮田よ、聞く前にまずは自分で考えよう、と彼女は心の中でつまらない俳句を作っていた。

結局、一日間の休みの間に文化祭のアイデアは不採用になつて、今やう考える氣も失せていた。

「そうだ！ 私たちだけの部活を作ろうよ～ 文化祭の出し物も私たちだけでやるの。どう？」

「俺たちだけでやるのか？」

苦笑いを浮かべて逃げようとする潮田のワイシャツを、彼女は素早く反応してつかんだ。

なにも行事をクラス単位で行うこともない。

何かを自分でするとこいつは同じはずだから、きっと許可が下りるはずだ。

そういったことを見越して、夕華は自信をもって彼を連れ戻した。

「潮田は私のこと嫌いになつたの？」

「いや。お前のこと嫌いにして、とにかく面倒は嫌だ。」

彼が泣いて許して貰いたいと願い出る姿を想像していた夕華は思
わぬ彼の言動にたじろぎ、むーっとした顔で潮田をにらんだ。

「ふう…

彼をほほほこにしようかと考えていたとき、隆平が急に鼻であざ
けり笑いをした。

「面白い。君のアイデア、やつてみよう。それと潮田。もし
し君が彼女によつて逝つたら、僕がこの腕で悲劇のストーリーを書
いてあげるよ。」

場の流れは一気に進んだ。

彼女が田を光らせ、二タ一タと笑いながら隆平の頭をなでると、
潮田の腰を抱え込んで、樹のそばにあつたぐずかごに頭からシュー
トした。

「決まりね。そうとなつたら、さつそく生徒会長に部をつくる
許可をもらわないと。」

「ああ。僕が今日の放課後にうまく掛けあつてみるよ。それ
と、なんて美しい死に様なんだ君は。わあ、どうやって表現しよ
う。」

潮田は白目をむいて口をあんぐりとあけていた。

そしてしづらしくして起き上がりつて、苦労の末に、白いペンキで塗
られたぐずかごの中から脱出した。

「お前の美しさの基準が分からんわー。あと、わざわざ文章で表現するな！」

彼の息の切れがちな声のあと、すぐに授業の始まりを告げるチャイムがなった。

「そこをなんとかお願ひします。」

隆平は夕華と潮田の二人で、生徒会長を務める道谷正使に深々と頭を下げていた。

部をつくるには部室が必要だが、先ほどから許可が下りる気配がない。

「我が校では、部員は最低でも五名以上を有しなければ、部活動を行う権利は認めない。わざわざ私に聞きたくとも、生徒手帳に書いてあるはずだが？」

つりあがった目つきと、くすりとも笑いそうにない仏頂面をした彼らとは一つ違ひの男の先輩だった。

夕華と潮田が呼ばれたのも、人数をこまかしていいかどうかという会長の意向だった。

「ですが、私たちは部を通じて何かを……」

「例外を認めれば公平さに欠け、校則は用済みも同じだ。それに何かだつて？」

会長は手帳を閉じて、椅子にだるやうに腰掛けた。

「目的も定まつていないものなど、相談するにも値しない。まさか、寝ぼけてるんじゃないよな？」

「隆平、何か言つてやつてよー。」

「こんなとき、彼ならどうにかしてくれると思つていた。」

「会長…。」

隆平の真剣な顔と言葉に、道谷会長も筋がありそつた男だと判断したのか、微妙に眉をひそめた。

「何かね？」

場の空気が重々しくなつてゆく。

「すげえ、二人の間に燃え盛る火柱が見える。」と潮田。

当然そんなものは見えないが、妙な威圧感が場を支配していた。

「会長は…」

「いけ、言つてやるんだ隆平！」

私は口を開いているのも忘れてその一人をじつと凝視した。

「会長は、ハイソックスと一ソックス、どっちが好みですか？」

「このバカああああああ！」

「ぐはっ！」

ドスつという強烈なごぶしの音とともに、隆平は倒れた。

「失礼しました！」

「おい、久野！」

彼女は話をそらした隆平を殴った後、気絶した彼を引きずつて早々に場を立ち去った。

「隆平、大丈夫か？」

潮田はとりあえず保健室まで行き、夕華に殴られた彼の頬を手当していた。

普段なら保健室のおばさんがいるのだが、放課後の時間になるといつも帰ってしまうのだ。

「自業自得よ。」

痛みに顔をゆがめる隆平に向かって、彼女は相変わらず厳しい態度を崩さない。

「あんまり怒るとハゲるぞ？」

潮田が「冗談交じりに」言った。

もちろん彼女をなげませるためだ。

「それを言つなら、しわが増えるでしょ？」

自分で言つのも女として恥ずかしかったが、今はそんな気分ではない。

なにしろ部をつくるチャンスをこのバカのせいで台無しきれたと本人は思っていた。

「いやいや、ここはあえて、『あんまり怒ると、インド産のコシヨウ国道に振りまくぞ？』のほつが君には似合つてるよ。」

それまで顔をさすつていた隆平が余裕の笑みで笑いだした。

「こいつ、全然反省してねえ…。ていうか、コシヨウまくなよ。

」

誰も困らないが、肺の弱い老人なんかにはさぞきついだろう。

とくに排氣ガスと香辛料のにおいが絶妙にマッチすると思われた。

「あんたねえ、少しほ申し訳ないと思わないわけ？　いい？　今

度あんなこと言つたら、『ショウだけじゃなくて、教室の上の階からミルクティー垂らすわよ。』

何気に彼女もつらっていた！

「面白やうだね。ミルクには養分が多く含まれているから、新種の植物が成長するよ、きっと。」

「だたの公害じやねえか。」

潮田はこのやつとりがいつまで続くのか、頬づえをつこて聞いているのも飽きたのか、自分からツツコんできた。

「なら私は、あなたをゆーちゃんと呼んでみたいです。」

「ちよつとい、隆平、何言つて違つ……」

彼女はその場にいなはずの声に、ふと振り返った。

「あなた、誰？」

おとなしい声の主が、文都高校の制服を着て、三人の前に立つていたのだ。

第5章 新たなる始まり（後書き）

次回の更新は6月1日の予定です。

第6章 小さな火を灯して、ついで、畢竟のよひ

「あなた、誰なの？　どうして私の名前を…」

夕華の質問に、彼女はテーブルの上に置いてあるジャージを指した。

夕華のY・Hのイニシャルがすその先に刻まれていた。

しかし、イニシャルだけで名前を判断できるはずがない。

「ひょっとして…」

そう、この少女はおそらくYのアルファベットから適切な名を連想したのだろう。

「悪いけど、私はゆーちゃんじゃなくて夕華なの。　といいで見えない子だけど、転入生？」

「ぐりと彼女は頷いた。

背は小さく、例えるなら人形のようになりふたり座っているような、物静かな印象を受ける。

眼鏡をかけていて、さらりとしたまっすぐな髪からは、清楚な香りがふんわりと引き立っていた。

「何年生？」

「一年です。」

明らかに生まれたての赤ん坊をあやす調子で話しかけた夕華は、自分と彼女が同じ年と知つておぼつかない愛想笑いをした。

いや、もはや苦笑いだ。

だが、その場にいた誰一人として夕華にドジを踏んだなどとは言わず、あっけにとられたように、「この子が一年生だったのか」という、一言で言つなら信じられないという顔をしていた。

「わ、私は久野夕華っていうの。あなたは？」

場を仕切りなおす意味を込め、彼女は小柄な体つきの少女に名をたずねた。

「ふじなみりっか
藤波律花。」

「律花さんね？　せっかく会つたんだし、友達に…」

彼女は言いかけてふと声を止めた。

そして隆平の方を見る。

自分たちの友達として迎えるかは、彼女がどうじう性格なのかによつて決まる。

一方的に自分たちの集いの中に入れて、後で後悔させるのはかわいそうな気がした。

「僕はいいと思うよ。嫌なら無理ことは言わない。それだけ
だ。」

後味の悪さにかまけていたら、何も始まらないということだらうか？

彼女は迷つてゐたが、その間にも転入生の少女は勝手に話を進めていた。

「じゃあ、あなたは今日から私のゆーちゃんです。」

「ちよつ…」

新たについたあだ名に頬を赤く染めながらも、彼女の静止は振り切られた。

「私のことはどうぞ自由に呼んでください。エリザベス、エリザベート、エリザベータ。なんでも構いませんが、ジョルジエットはダメです。」

力のないというか、声に感情の表れがなく、怒つているのか悲しんでいるのか不明なくらいの棒読みで、しかも顔色一つ変えない。

それが律花だつた。

ついでに言つと、なぜジョルジエットがダメなのかは分からなかつた。

「とにかくよ、本人が良いつて言つてんだから、この際だから友

達になつてやるひせ。」

途方に暮れる夕華の肩に手を置いて揉みほぐす潮田も、少女に自己紹介した。

「俺は潮田弘樹つていうんだ。 よろしくな、律花。」

「はー。」

彼女は返事はしたが、潮田のワックスのかかった針山のような髪をおそおそおそる触ろうとする。

「何やつてんだ?」

「いえ、これはなんという生き物なのですか? ウニは人の頭に住むのですか?」

保健室に、一瞬だけ沈黙が流れた。

「あ、あのな。 これはワックスつて言つてだな…」

潮田が説明を始めるが、彼女は無表情のままで、ちゃんと意味が理解できているのかは分からない。

「ワックスとほおいしいのですか?」

「はいはーい。 ダメですよー。 食べられませんよ律花ひちゃん。」

「

何かと勘違いしている律花を必死に止めようとする夕華は、ギロ

リと隆平に視線を送った。

二人の視線が交差し、その間では激しい感情が心の中でぶつかり合つ。

「あんな子部員にして大丈夫なの？ ワッフルと思ってるじゃないの、このバカ！」

「別に。 ああいう子がいた方が、意外と盛り上がりでいいかもしれない。 おっと、自己紹介がまだだつた。」

隆平は律花のところまで行って手を握つた。

「よろしく。 僕は木島隆平だ。 趣味とかはあるの？」

「はい。 大地の嘆き・プラスシチュエーションです。」

「…。」

「何がプラスされているんだい？」

「それ以前に、大地の嘆きがなんなのか分からないうわ。」

とにかく不思議な子という以外、他にどの言葉もあてはまりそうにもなかつた。

「大地の嘆きとは、つまり…」

「おっと言わなくていい。 なんか聞いたやいけない気がする。」

潮田の青ざめた顔は、とにかくやばい、この子は変だ、と訴えていた。

「これで残るメンバーはあと一人になつたってことね。なんとかできないかしら。」

最低でも五名…

会長の意地の悪そうな顔が不意によみがえる。

「大丈夫さ。俺に考えがある。」

「まさか、あいつ?」

彼は今はそれしか手はないという顔でうなづいた。

翌日、四人は昼休みの教室を抜け出して屋上にいた。

「あいつならいいつもこいつへんに。おっ、いたいた。よつ葉ひ山。」

潮田は貯水タンクの上に器用に登つて寝そべつている男子に話しかけた。

背は高く、ワイシャツの下から赤い派手なシャツが透けて見えている。

髪は女のよつて髪く、だらしなやじこつよつせび」か清潔感を漂わせていた。

「ん？ 潮田じゃねえか。お前らクラス中のうわさになってるぞ？」ついに俺のように扱われる口が来たよつだな。」

彼は起き上がって潮田と肩を組んだ。

「俺はお前を悪く言つたりしねえぜ。何しり仲間だからな。」

彼のやまは荒山蓮。

夕華たちのクラスメートで、隠れてホストをしている。

そのせいで学校中から氣味悪いがられているのだ。

「悪いが俺はホストに興味はない。でも仲間を探してゐるってことは確かだ。」

「ん？ ピンこいつ意味だ？」

彼は話を聞いて決心したよつてがばりと起き上がった。

「つまり、俺にお前たちの集まりへ入れと？」

「まあ、簡単だ言えばやつなる。」

だが荒山は、はあ、と息をもらして潮田に言つた。

「いいか。俺はあのクラスでビッグ言われよつと構わんが、かわいい女の子がいなけりや、話にならんな。」

「う、この男の趣味はナンパだつた。

いるのは夕華と律花の二人。

「この面子おもてでは西の氣きは惹ひけないと？」

「悪いがそいついつた。それに部の名前なまなまだなんだ？」

「奴やつ前まは『ふとこさいつぶししたくなつたあの口くちの血販機けはんぎ』でいこうと申いひ。」と隆平。

「えよー、何をやつくんのかすり即興そくこうすげて分かんねえよー。」

すかたず潮田がシッしむ。

「その前にこざつづぶせないわよ。つていつか、こんなナンパ男おとこじゃ話にならないわ。」

「なんだと？」

思わず言いこすれてしまつた夕華は口くちをふたぐがもつ遲おく。

荒山は真剣な顔で、なぜか律花の前まで出てきて言いつた。

「やあ、かわいいね。眼鏡めがねをとつた君を見てみたいな。」

「ナンパかい！ あーあ、緊張して損そこなした。」

じうこれは荒山のこつもの礼儀に違いないと思つてゐた夕華だった。

ナンパは趣味の領域とは言え、彼は会つてしまつた女子は口説くのが常だといつも豪語していたのだ。

だが律花が眼鏡を取つたとき……

「ぐはっー」

なこにやら荒山は打けのめされた声を出して、頭をもたげた。

「どうしたのですか？」

律花がいぶかしげに質問すると同時に、彼は彼女の肩をがつしりとつかんだ。

「付き合つてくれーーー 可憐なお嬢さん。」

見事に一悶ぼれしていった。

「はー。」

律花はあまりこもあつたりと返事をした。

「あと私は隆平さんの考へた名前よりも、『ふとぶつ殺したくなつたあの日の勇者』のまづがいいと思います。」

「もう一度言つが、長えよー。つーか、あぶねえ言葉が入りすぎ

だよ！ 世界が魔王から救われねえし、バッドエンドだよー。あと律花。付き合つとか、ナンパの意味わかつてんのか？」

潮田はツツ「//」を入れ過ぎて息を切らしていた。

「はい、突き合つと難破ですね？ ちゃんと辞書で調べましたから大丈夫です。」

意味がかみ合つてないようだが、彼にはもつツツ「//」を入れる力が、とくに前者には残されていなかつたようだ。

そのまま黙つて床に倒れこんだ。

「なるほどな。俺つて難破が趣味だつたのか…」

なぜか荒山が納得していた！

「で、僕たちの集まりに参加するのかい、荒山君？」

「ふつ…。どうやら入るしかなさうだな。俺は今日から律花一筋でいくー、ぎゃあああああー！」

律花の手を握ろうとした荒山はせつなく彼女の肘にみぞおちを突かれていた。

「つてことは、これで五人集まつたのね？ やつた―――つ！ やつたわ隆平！」

彼女の飛び上がるような歓喜の声は、午後のゆつたりと流れる白い雲まで登つて行つた。

「なんだって？ 部室がなにってどういってんだよ？」

潮田は予想もしなかった会長の言葉に舌を荒ざめた。

「今述べたとおり、部室は全て他の部の使用で埋まっている。」

ならば、なぜ最初にそのことを私たちに言つてくれなかつたのか、夕華は会長の自分たちを見下したような態度に腹を立てた。

「もうこいつめぐれ者は、社会では生きられないんだってこと教えてるのが俺たちの仕事だ。」

「え？ なんで教えてくれなかつたのよ？」

「聞きたくない君たちが悪いだらう～、君らひとつて部をつくるということはそれほど重要ではないから、私も言わなかつただけだ。そもそも、そんな中途半端な気持ちで事をなそつとする部は、かえつて迷惑だよ。」

「へー…」

前に出てつとじた夕華を隆平がおむねたんだ。

第6章 小さな火を灯していく、田代めのよろこび（後書き）

次回の更新は6月5日の予定です。

「こんにちばよ。さて、今回で8回目の投稿となるわけですが、どうやら皆さんに『ご満足いただけていない』ようですね。話の展開の方や登場人物など、さまざまなところに問題があるのかもしねません。

簡潔に申し上げますと、失敗したということになります。そこで私は、失敗作をそのまま書き続けるのか、それとも失敗してしまったのだから、無駄な執筆をこれ以上避け、別の作品に力を注ぐべきか悩みました。ソリデュスという作品で前回失敗したこともありましたし、私自身、物語を途中で終わらせてしまうのは、もつたないという気があるのですが、信条よりも大切なものは、読者の皆様に読んでいただき、楽しんでいただくことであると思います。しかしながら今回の作品においては、楽しんでいただけるはずの展開にしていたにも関わらず、『ご満足いただけていない』です。そのため本作品を中身のない小説だと私は判断し、大変申し訳ございませんが、（あくまで私の主観ですので、お読みいただいている方への侮辱ではございません。）執筆を中心させていただきます。したがってしばらくの間は残しておきますが、めどが立ち次第、本作品を消去する予定です。

その代わりとして、時間はかかりますが新たな小説の枠組み作りに着手していくつもりです。どうすれば読んでいて面白くなるのかを徹底的に考えていくつもりです。本作品をお読みになつてくださつた方々にはひたすら感謝の意と、お詫びを申し上げます。よろしければ、今後もカーレンベルクの応援をぜひともお願いたします。

隆平は彼女を止めると生徒会長の前に出た。

「お願いします。」

「ちよつと隆平。 やめなさい。 こんなやつは...」

頭を下げる隆平を見て、夕華は会長をにじみつける。

あの日の教師を見るような目で。

「この間冗談を言われた時は驚いたが、君は彼女と違つて少しは骨がありそうだな。 いいだろ?」

それが人にものを頼む態度かと言われそうだったが、会長は夕華を相手にすらしていなかつたようだ。

そのおかげでどうわけでもないが、会長の口から信じられない言葉が出た。

ただし条件付きでとこう一言も一緒にだつたが、一筋の光がさしたものには変わりない。

「なんだよ、条件つて。 会長をナンパすりやいいのか?」

「お前はホモか!」

荒山は潮田に数発頭を殴られた。

「れんぢやんは、ホモ・サピエンスなのですか?」

「うーかーよ！ あと、『れんぢやん』ってなんだよ。 講博に出
てきそうな呼び方だな。」

「れんちゃんはれんちゃんです。」
「いやなら、連刃衝空破！」

律花はそう言つて真顔で技名を叫び、太極拳のような構えをして
いる。

「前者と後者のギャップが激しそぎだわ、って今それどーじじやないでしょ。」

夕華は話をもとにもどそつと、とつあえず怒りの感情は置いておくことにして会長にたずねた。

「で？ その条件つて何なんですか？」

「うむ。見てほしいものがある。」

会長は一度だけせき払いをすると、机の中から一枚の図を取り出した。

「これって…」

「そつ。学校の全部活動名と、各部の状況をまとめた表だ。
そして君にはここに注目してもらいたい。」

道谷の指の先には、 理工学部、部員数1 と書かれていた。

「まさか僕たちにこの部に入れと言いたいのかい？」

「ちうじやない。 ちうじやないが、ただ…」

珍しいことに、周囲から恐れられているはずの会長がうなつて何かを考えていた。

一体、この部のちうじくない点があるのだらうか？

「ここには、その、一言で言えば変な奴がいる。本来ならば理工学部は去年の夏に廃部になつているはずだったんだ。あいつさえいなければ…」

次第に会長は怒りをありありと思い起しきさせて机に手をついた。

「私たちにちうじして欲しいの？」

「無論だ。この私が、どれだけ規律を重んじる人間か分かるだろう。そこの部室に居座り続ける変な奴を追い払え。もしそれができたら、代わりにそいつの使っていた部室を君たちに譲ろう。これで文句はないか？」

「それはいいけどよ。変な奴って、一体誰だ？ ビームを吐いたりするのか？」

「吐くわけないでしょ！」

夕華は思い切り荒山の髪を引っ張った。

「痛え！　てめえ女だろ？　髪はもつひとつ大事にじるよ。」

「お前はどうなんだよロン毛。」

潮田の髪のとおり、男で髪を大切にするやつも珍しかった。

「れんちゃんの髪はロンギヌスの槍ででもしてますか？」

「んなわけあるか！　つていうか律花。なんで無駄にヘビー級な知識ばっかりあんだよ。少しは常識つてものをだな。」

「そこまでだ。」

会長がポンポンと手を叩いてその場を鎮めた。

「常識がないのは君ら全員だ。こんなところで騒ぎ立てるもんじゃない。場所を考えろ。後は、実際にそいつを見た方が早い。いいな。」

そして分かつたらわざと退出していくと会長は言った。

「会長。」

「なんだ木島君。まだ言い残したことあるのか？」

「実は今会長自身、『ひやつぼ——つ今日もあの駄菓子屋でガチャガチャ千回やってやるぜー！　巫女さんファイギュア当てるぜ

——つーつて思つてません?」

「…。」「

殴られた。

理工学部の部室は理科室の横にくつついで、隠れ家のよつて小さな薄汚れたドアがその氣味悪い存在を物語つていた。

「確かにここにあるとは聞いたが…」

荒山は理工学部の部室を前にして、とんでもないとひきこめてしまつたと身を縮めるよつとして肩をこわばらせた。

「それにしても、本当に変な奴が出てきそつなどいろだな。」

潮田は周りを落ち着いた様子で見渡し、古ぼけた茶色い棚たなの中にあるアルコールランプをとつた。

手で触ると、触れた部分にくつきつと指の跡が残るほびほびくほこりがたまっていた。

「あんた、よく平氣ね。律花ちゃん、大丈夫?」

夕華が不安そうなおどおどとした調子で潮田の後ろに隠れながら言った。

「心配いりません。それよりもまずは自分を心配すべきではないのですか？ ゆーちゃんは今すぐにアトラスを召喚すべきです。」「

アトラスを召喚することは不可能だが、とにかく進んでみないとには始まらない。

覚悟を決めたのか、くもつたスマートガラスのそばにあつた鍵をとり、隆平はドアにむかってみる。

錠前のはずれる音がした。

「開いたの？」

「ああ。僕が先に入るから、待つて。」

「気をつけよ隆平。危なくなつたら出できてよ。」

「心配ないや。」

ガツツポーズをとる隆平は夕華に見送られて中に入った、その時……

「ハーハツハツハツハツハツハツハーハー！」

聞いたことのない中年の男の声が、理科室のスピーカーから流れてきた。

「なんだ？ 一体何が始まつてんだ。」

そこにいた全員があとすきりして警戒する。

「隆平！」

夕華はそのとたれ恐怖を忘れて彼のもとへと走り、ドアを開けた。中は以外と広く、奥にはやうらひもつ一つ小部屋があるようだ。

「フハハハハハハハハ！」ひつちだよ夕華！」

「誰？ どうして私の名前を？」

「去年の英語の中間テストは五点だったよー。」

「つて、それって！」ひつちだよ夕華！

彼女は悪寒を感じて引き返そうとしたが、今は隆平を助けなくてはいけない。

「隆平、出てきて！ いるんでしょ？」

だがじくら呼んでも返事はない。

彼は必死に隆平を探したが…

「お前かああああああー！」

いた。

彼は部屋のそばにあったテーブルの下に隠れて無線で声色を変えていた。

「痛つ！ わかつた、わかつたからやめてよ久野さん。」

「もう一、本当に心配したのよ？ わかつてんの？」

彼女はしばらく彼に当たつていたが、駆け付けた仲間に抑えられた。

「何事かと来てみれば、隆平。 この学校でお前ほど人騒がせなやつはいないんじゃねえのか？」

潮田はあきれ返つて彼の無線機を手にとった。

だが、手に取つてみて彼のものではないことはすぐにわかつた。

「確かに使つたのは僕だけど、まだ誰がいるかは突きとめていなによ。 鍵がかかっていたつてことは留守か、あるいは職員がいるのに気づかず、鍵を閉めてしまったかだ。」

言われてみれば、床のいたるところに備蓄されたインスタント食
品や、理工学部らしく、一通りの電化製品はそろつていた。

「いるのか、ヤ二二…」

潮田は奥にあるもう一つの小部屋に目を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233/>

普通じゃない生徒たちの密約と冒険～僕らは普通でないことが嬉しい～
2010年10月20日19時14分発行